

特集

可能性としての三重

「地域」研究から「人間」研究へ向けて

―「ハイブリッド地理学」から考える三重の可能性―

野中健一
池口明子

I はじめに

私たちは、人間と自然との関係について人文・社会科学のな見地からの関心をもって、日本、東南アジア、アフリカ、オセアニア各地での自然資源の利用を中心にした研究を行っている。こうした現場で目の当たりにする人と自然との関わり合いの姿は、人間の魅力とともに現代社会の直面する資源・環境問題の中にも重要な事実

を示す。しかし、それをこれまでの枠組みによって記述しようとする、その「生きる姿」とかい離してしまふという問題があり、それをどうするかをフィールドと理論研究との間を行きつ戻りつ議論を交わしてきた。その中で、1999年にイギリスで出版された *Human Geography Today* に取められた、サラ・ファットモア (Sarah Watmore) による「ハイブリッド地理学：人文地理学における」人

間¹の再考」(原題: "Hybrid Geographies: Rethinking the Human in Human Geography") に私たちが注目した。この論文は、人間と自然との関わりを、生き生きとした現実世界の中の具体的な「生きる姿」としてみることによって、「人間性」を理解するための新たな枠組みを提示する。これは、私たちの抱える問題を解決するばかりでなく、人文・社会科学においても新鮮な視点であるとの見地に至った。



ベトナム、ハノイ市街の市場

II ハイブリッド 地理学の視点

ファットモアは、論題に「人間の再考」とあげているように、我々が「人間」あるいは「人間性」としているものは何かを、人間と自然の概念の検討をおして考えようとする。そして、人間を生きる有機体の実在としてとらえ、これまでの人文・社会科学にある文化と自然の二元論を解消するための方法が必要であるとする。その方法として、人間と自然を混じり合った集合体としてとらえ、その関係性を空間性と位置性から分析するという「ハイブリッド地理学」を提起している。

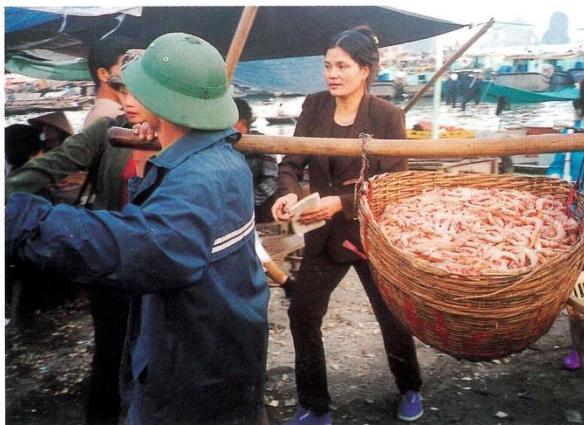
まず、人間性の理解にあたっては、近年社会学や人類学で進展してきた「アクタントネットワーク理論（以下ANTと記す）」が概念ツールとして用いられる。これは、自発性、変革性、創造性というような、人間が世界に働きかける能動的行為側面に注目するものである。その行為は、ある単一の意志を前提とするのではなく、日常生活

活の実践に見られる様々な事象の関係性のうえに紡がれる「不確かな達成」(Law 1994:10)である。こうした側面は、これまで人文・社会科学において広く認識されてきた個人・集団、グローバル・ローカル、主体・客体等の二元論ではくみ取ることができない(Murdoch 1997)。従来、ポストモダンの社会科学では、あまりに人間の言語能力に重点をおきすぎたために、世界を「言語的生産物」としてのみ扱う傾向にあった(Wharmore 1992a)。そこで、人間は生まれたときから言語能力をもつのではなく、外部との関係性によって習得していく存在である(Ingold 1995, 1998)ことに注目する。そして、

ANTでは世界の理解において、実体を持った人・モノ・人工物を同レベルに扱い、社会の安定と変容をもたらす力(エージェンシー)を、固定された社会制度やプロセスの中に組み込まれているのではなく、文脈的・一時的にもつ関係性としてとらえようとする(Murdoch 1997, Strathern 1999)。これらを、関係性をもつことによって互いに

意味付け合い、エージェンシーをもたらず「アクタント」とみる(Law 1999)ことによって、人間の能動的側面の理解へと向かう。

ファットモアは、これらの概念を用いながらアクタントとしての人と自然がごたごたになった「混成」の空間を提示することによって、「自然」と「社会」の先験的分離を解消することを提案する。すなわち、「自然を、私たちがそこへ行くことのできる場所としてとらえるのではなく、私たち自身の中に自由自在に存在するものとしてとらえ直す」ことが必要であるとするのである(Ducroz)。その「自然」は個々の生存戦略をもった「いきもの」や、それに含まれる、人の身体(Vaughn 1999)として私たちの前に現れる。この空間とアクタントを理解するために、人と自然を二元化しない「混成性」、社会生活の「集合性」、人の存在を「いきもの(living thing)」としてとらえるための「肉体的存在性」が重視される。そして、ハイブリッド地理学では、アクタントがいかに相互に関連して位置づけられ



ベトナム、ハロン市場。船から市場へエビを運び込む

るのかを、その「状況規定性」から理解しようとする。そのために、混成空間において、人と人以外の存在とが結ぶ、親密でいきいきとした関係性を見いだすことが必要であるとして、具体的な姿・形、動き、関係性をもつ存在である野生動物のトポロジーから考えることが提案される。

しかしながら、ファットモア自身が文中で述べるように、具体的な実証の方向性は未だ見いだされていない。ANTが欧米における科学批判から生まれた理論であることに留意すると、その実証の場を考えるにあたって、混成する姿を欧米以外のフィールドに求めることは重要である(例えば、Verhaan 1999, Strathern 1999)。次章では、実証としての地域研究を念頭において、その中での地域概念の再考と人間再考につなげてみたい。

III 状況規定の場としての地域のとらえかた

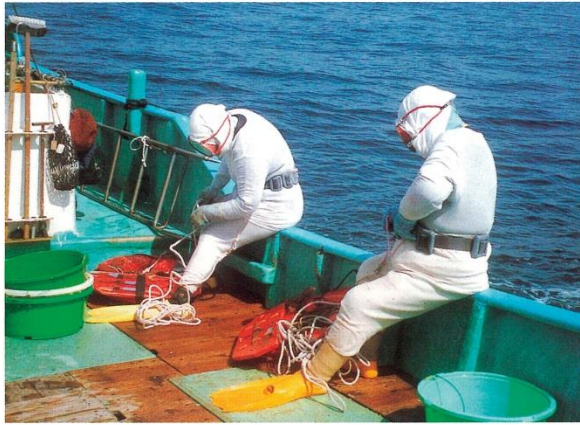
アクタントとしての人間を考えると、その時々々の状況に応じて決

定される「動き」を通して、何をやるか、何を考えるか、どうしてそれを行い得るのかを検証することが必要である。それはあまりにも個人的あるいは偶然的であって、そこから総体としての人間を導き出そうとするのは不可能なことのようにも思われてしまう。そこで、ファットモアの主張するように、集合性のなかに、個別の人を対象としながらも相互の関係性をもたらず空間性・位置性を加えて分析することが、個別から普遍へつなぐ方法論となる。では、空間性・位置性をもった具体的な姿はどこに見いだせるであろうか。

従来の、西洋的思想に発する二元論的視点では、「社会」すなわち「人」の領域と「自然」の領域それぞれが隔てられ、かつ、ある種均質化した空間として捉えられてきた。しかし、ハイブリッド地理学においては、自然とは、それぞれが動態的な関係性のなかに個々の生存戦略を持った「いきもの」であり、またそれゆえに私たち個人個人の日常の生活のなかに特定の位置づけを持った「いきもの」と

してとらえられる。「いきもの」としての「人」は種としての普遍性を持つと同時に歴史的、地理的な差異をもつ。このように考えたとき、「いきもの」は「人」の生物学的生存戦略のなかで位置づけられるというよりは、むしろある特定の地理的・歴史的文脈において位置づけられる、という事実が重要となる。多様かつ変化する時空間において、人が自律性をもった「いきもの」にどう対応するか、そのやり方、関連づけ方は、あるスケールをもった空間に生きてきた経験と受け継いできた歴史の連続性に依拠しているのである。このような空間を混成した集合体とみることによって、実証研究において取り扱われてきた「地域」の概念に次の二つの視点を加えることができる。

一つは、地域という現場を対象とした人文・社会科学の可能性の広がりである。たとえば、地域研究においては地域の具体像を明らかにしなければいけないという言葉をよく耳にする。すなわち、「地域の『匂い』のする」あるいは



志摩町和具で操業する海女

「泥臭い」「研究」という言い回しである。ここで比喩される「匂い」こそが、各地の状況によって関係づけられ、位置づけられている混成のなかでの、規定のされ方であって、それは、現場へ入り込むことによって、現場の姿をみるることによってこそ、見いだすことができるのである。これを具体化するものこそ「混成」の概念である状況規定性であろう。匂いとしていたものは、決して主材料をおいしくするためのフレーバーではなく、匂いそのものが「アクタント」となって、それが人間性という普遍的な問題への理解を導くのである。この観点から、これまでフィールドワークとして現場を取り上げてきた学問以外にも、多くの分野が実証面からあるいは理論面から「現場の姿」に取り組むことが必要となる。

もう一つは、地域が構造論やシステム論による位置づけ（中央―地方、都市―周辺、あるいは世界システムのなかでの従属論）へと埋没してしまう呪縛の解消である。現在みられる地域をまとめるため

の領域区分（例えば、都市、第三世界、農村、漁村）のように先験的なあるいは代表化した地域単位へ分けることに対し、混成とみることによって、地域の違いを地域・領域の枠組みからはみ出すことができる。「人間」あるいは「モノ」の関係性をみることによって、地域の人を、その先験的な構造のためにとらえられてしまう見方（例えば、地域を、全体の中でのパランスシートとしてみる見方や、人の生活を消費・生産のアウトプットでみる見方）、より一般的には、従属や周辺化をみることを目的とする構造やシステムといったグラウンドセオリーの枠組みから解き放つことにもつながる。

この二点にたつて「人間」を「地域」において考えてみよう。たとえば、都市という空間は、自然あるいは「いきもの」がもつ状況規定性を排することによって構築されているといえる。メディアや企業といった集団がつくる一定の規範があちこちに織り込まれている。しかし、その結果のみに注目し、「社会」を理解しようとするこ

とは、人間の活動を表象としてとらえることにも似ている。現代都市のようなデザインされた世界、表象の世界の枠組みからは、さまざまな状況が発生する自然の中で生きる姿は、考えられない動きとして捨棄されてしまう。しかし、人間性を状況規定性から注目するのであれば、自然のもつ偶然性や変動性のなかにおかれて、その場に独自に構築された人の対応の仕方に目を向けることがより重要になる。ある状況の網の目の中で人が画策しながら、どのように行動していくか、という過程こそが、生きていく姿である。それは、具体的な姿を追求するという実証なしには明らかにできないことである。この「生きる姿」に人間性の理解に重要な、行為の能動的側面を見いだすことは、グラウンドセオリーの陰に隠れてしまうさまざまな土地に生きる人たちやその行為を等しく見るといふことへとつながる。

また、状況規定性を重視することは、現代の、自然とは不可分にある地域経済あるいは地域研究に



大阪市内で販売される「伊勢物」の魚

においても、また研究者自身の位置づけに対しても重要な視点を投げかける。すなわち、状況に規定される人間を主体におくことによって、個人が何を欲し選択するかは、根本的にはローカルな関係性の成立によるものであること、それがどのように成り立っているのかを位置性によってとらえる視点とを提示できる。また、見る側（研究者）の「状況規定性」「位置性」を常に意識することは、見る側にとって「意外」な価値・規範（例えば、幸せなこと、おいしいもの、楽しいこと）の発見を「状況を生きる人間」の理解へと結びつけるために必要となる。この考え方は、文化の多様性に注目する人類学や地理学における地域性の抽出にもみいだすことができる。しかし、行為の主体として明らかにする目標単位を民族、社会集団、地域集団という単位から解き放つことによって、人の様々な行為が展開する豊かな土壌のうえに、総体としての人間性をとらえることができる。すなわち、人間の魅力や可能性を、人間のもつ自然性と

その場に独自に構築してきた人の対応の仕方に見いだし、それを各々の歴史、関係性から明らかにすることの必要性和重要性を主張できるのである。

IV 混成空間の 具体的な姿と 三重の可能性

では、混成空間は具体的にどのような見いだせるであろうか。私たちがこれまで経験してきたフィールドでの自然資源の利用を例に考えてみよう。これは、野生生物を生活空間の中で認識し、その動きと関係性に対応しながら生活の中に取り込むという一連の過程をもった行為であり、それらは、相互に関連し、かつ、さまざまな状況のもとで成り立っている。すなわち、ファットモアのいう野生生物のトポロジーと状況規定性を具現化しているものなのである。その姿は、ここ三重では様々な場所にみいだすことができる。たとえば、伊勢湾沿岸を見てもよい。志摩でアワビを採る人や、松阪から

大阪へ捕れたての鮮魚を運び商う人、白子海岸のシラス加工場のままで遊ぶ子ども、こうした姿は日常の光景としてうつるものであるが、それらは、環境の巧みな利用、現状での操業形態、経済性の中での選択、海面利用における領域の問題の歴史性など、地理的歴史的文脈の上に結ばれた関係性によって、具体的な「モノ」や「人」として存在している。そこにみられる存在の一つ一つは状況に規定されたネットワークのうえに成り立っているものであり、多様に意味づけられた混成の空間の中での存在としてとらえることができる。このような混成空間は、たんに伊勢湾の三重県側だけではなく、伊勢湾全体としてみたときの相互関連性を軸にとらえられなければならない。その中で、過疎問題、自然資源を活かした産業・生活の存続、四日市公害とその克服などの、歴史的・地理的位置性を理解することが、人の行為の多様性とその可能性を見いだすことになる。そして、ここで取り上げた例が漁業という経済的・技術的問題だけでな



志摩の家庭料理「うるめ寿司」

く、人の能動的行為とそれを成り立たせるさまざまな状況規定性から解明することの意義へとつながるのである。またこうした研究は、世界で、とくに東南アジア諸地域で今後いっそう深刻になるであろう、都市問題・環境問題に対して、それを乗り越えてきた方法、あるいは、現状のなかでの第一次産業の存続などを、アピールする可能性を開くであろう。以上のことから、相互関係や状況規定性からの分析は、地域の姿を明らかにすることを最終目的とした従来の地域研究ではなく、普遍的な人間の思考・創造の探究へ向けた地域研究となりうると考える。

最後に、このような研究を実践していくためには、対象を集合体・混成としてとらえることのできる研究主体の存在の仕方が問われなくてはならない。そこで、第1に、現場へ直接出向き、具体的な姿・情報を得る方法の意義を認めること、第2に、現場の事実と理論の間を繋ぐ（理論から現場へ、あるいは現場から理論への双方向性）「インターフェイス」を考える場と

しての研究の「位置性」を認識すること、第3に「三重」研究が、「地域からみる人間理解の仕方」の実地型研究教育実践となること、が必要である。そして、さまざまな要素が混成する現実を理解するためには、様々な学問の共同が必要となる。それには状況に応じた柔軟な連携がとれる体制であることが欠かせない。それは、研究ウェットとでもいうものであり、研究主体の自律性が要求されるとともに、その相互関連によってこそ現実が理解されることは、連携する様々な人や組織が相互に不可欠な存在であることを示すことになる。こうした実践のしかたこそが、三重および三重大学の機関がその独自性を主張できるものである。

（のなかけいち）
・人文学部助教授・地理学
（いけぐちあきこ）名古屋大学大学院
文学研究科博士前期課程・地理学

参考文献

- Ingold, Tim (1988) "The animal in the study of humanity" In T. Ingold (ed.), *What is an Animal?* London, Allen and Unwin, 84-99.
 Ingold, Tim (1995) "People like us: The concept of the anatomically modern human" *Cultural Dynamics* 7-2:187-214.
 Law, John (1999) "After ANT: complexity, naming and topology" In J. Law and J. Hassard (eds.), *Actor Network Theory and after*, 1-14.
 Murdoch, Jonathan (1997) "Towards a geography of heterogenous associations" *Progress in Human Geography* 21-3:321-37
 Strathern, Marilyn (1999) "What is intellectual property after?" In J. Law and J. Hassard (eds.), *Actor Network Theory and after*, 156-180.
 Valentine, Gill (1999) "A corporeal geography of consumption" *Society and Space* 17-3:329-352.
 Verran, Helen (1999) "Staying true to the laughter in Nigerian classrooms" In J. Law and J. Hassard (eds.), *Actor Network Theory and after*, 136-155.
 Whatmore, Sarah (1999) "Hybrid Geographies: Rethinking the "Human" in Human Geography" In D. Massey, J. Allen, and P. Sarre (eds.), *Human Geography Today*. Polity Press, 22-39.